

魯迅「離婚」についてのノート ——魯迅の民衆觀等から見る

中 井 政 喜

I はじめに*¹

小説「離婚」(1925・11・6、週刊『語絲』第54期、1925・11・23)における愛姑という農村女性の性格・思想および反抗・闘争を、どのように考えることができるのか。小論はこの点を明らかにすることを目指したい。そのために、これまでの「離婚」研究史の代表的なものを取りあげて、若干詳しく検討する(そのほかの、特徴のある研究については、注で紹介する)。このことをとおして小論は、愛姑の性格・思想および反抗・闘争について、物語の筋と構造に基づいた解釈に若干触れながら、主として魯迅の民衆觀の変化・発展過程において、また1925年当時の彼の社会觀、当時の社会状況に基づいて解釈することを目的とする。

先ず、私なりの簡単な便宜上の粗筋を紹介しておきたい。場面は二つに分かれる。

主人公愛姑は清末のある日²、父親の莊木三(近隣の農民に一目置かれる富裕な自作農と思われる)とともに乗合船で慰老爺〔慰旦那〕の新年の祝いの会にでかける。そこには七大人も招かれている。船中の農民同士の会話よって、この間の事情が語られる。愛姑はこの三年間、夫の家(施家)と紛争を起こしていた。夫はある寡婦と親密になり、施家は愛姑に離婚を要求する。莊家はこれに抗議し、施家のかまどの打ち壊しをした。愛姑は意地で離婚を拒否しつづけ、慰老爺の調停にも反抗する。その日、調停が七大人を交えて、慰老爺の屋敷で行われることになっていた。

愛姑は七大人には読書人の見識があり、公平な裁きがなされるはずであると信じていた。屋敷の広間で、慰老爺から七大人の意向が先ず伝えられる。別れるのがよい、手切れ金は10元積みまして90元とする。父親莊木三は何も言わず、愛姑は勇を鼓して自分の婚姻の正当性を主張し、裁判も辞さないと言う。七大人はこの措置が決して愛姑にとって不利ではないと言い聞かせる。愛姑は孤立無援の中で、七大人に失望しつつ、なお抵抗しようとする。しかし七大人の「来～～兮〔これ～～へ〕」の声に、愛姑は突然おびえ、状況が急激に悪化したと思ひこむ。愛姑は自分が誤っていたと感じ、七大人の斡旋に従うことを述べる。こうして離婚が成立する。

II 「離婚」の先行研究と課題

一 「離婚」の先行研究について

1 「辛亥の女児——1925 年的『離婚』」(須旅^{しゆりよ}*3、『魯迅研究叢刊』第1輯、魯迅文化出版社、1941・1、『魯迅研究學術論著資料匯編 1913-1983』第3巻、中国文聯出版公司、1987・3)は、秦林芳によれば*4、その後の「離婚」研究に比較的大きな影響を与えた論文であると言う。「辛亥の女児」(前掲、1941・1)は次のように指摘する。辛亥革命は挫折し、封建的経済基礎を突き動かすことがなかった。そのため中国の女性は辛亥革命から何もものを得ることがなかった。この「辛亥の娘」とは、自然発生的に封建社会に反抗するけれども、孤立し敗北せざるをえない女性、辛亥革命後の旧社会(「辛亥革命の刻印がある」(454頁)とする)がその敗北を傍観したにすぎない女性を指す、と思われる。同論文は、魯迅が都市ではなく、中国の女性の大部分が暮らす旧社会の農村の女性を取りあげたところに意味があるとする。また魯迅は、農村女性の婚姻関係を地主の搾取関係(「封建的超経済的搾取」と結びつけてあつかい、その本質を明らかにしているとする。愛姑には二重性がある。一つは、その野性的な性格で、魯迅は愛姑の農民的な粗野な勇気を称揚する。愛姑の「意地」は(自然発生的な)ものであるようだが、また自分の家庭生活が破壊されるのを甘受しないためであるが、しかし「これはまさしく愛姑の人格の覚醒する萌芽である。」(454頁)もう一つの側面は、愛姑の無力である。愛姑には闘争の精神があるが、しかしその闘争は自覚的な闘争ではない。それが愛姑の無力である。魯迅は、愛姑のような人物に対して心から愛した。しかし愛姑を粉飾しなかった、当時の現実を粉飾しなかったとする。「愛姑はかつて自然発生的に自分の(人格)のために封建勢力と闘争した。しかし敗北した。」(456頁)「愛姑は闘争の中で貴重な野性を現した。」(456頁)

2 「説『離婚』」(呉組細^{ごせしやう}、『中国現代文学研究叢刊』1985年第1期、1985・1)は、この物語の意味を、愛姑個人の結婚の問題、それをめぐって彼女が抑圧を受けた問題であるとは考えない。「辛亥の娘」愛姑の反抗を民主主義革命の観点からとらえ、その積極的意義を社会的思想的な観点から評価して、女性が人権、民主的権利を争う問題としてとらえる。同論文は、愛姑の「二本の鎌」あるいは「鎌式」の足を、「どうやら、纏足の足でもなく、自然な足でもなく、纏足を解いてなお完全には解かれていない、大きくもなく小さくもない足である」(97頁)とする。纏足をし、その後纏足を解こうとする意志をもった女性であると解釈する。愛姑の生活する農村が東南沿海地区にあり、商品経済がもともと発達して、文化と思想において他地域とは異なった様相があったとする。また一人一人の登場する農民について詳細に分析する。

「愛姑の時代はまさしく辛亥革命の後であり、この革命を中国資産階級〔資本家階級〕が指導した。しかし反帝反封建の任務は達成されなかった。(中略)そのためこの革命はひとりの皇帝を追い払っただけで、これに替わってできたのは、むしろ依然とし

て地主階級の軍閥官僚政治であった。中国は依然、帝国主義と封建主義の圧迫と搾取のもとにあった。

愛姑という初めて人権思想をもった農村女性の性格は、まさしく上述の時代の社会と階級的特徴の反映である。彼女の闘争の軟弱さと目標のなさ、彼女が封建的支配勢力を信じ、そして七大人の威勢に甘んじて屈服するのは、上述の分析から説明することができる。」(99頁)

魯迅はこの「辛亥の娘」の態度における、闘争する勇氣と容赦のない暴露を称賛するとする。しかしその重点は、愛姑の闘争の弱点を諷刺するという一面にある。それは旧民主主義革命に対する失望と否定の気持ちの流露でもあるとする。

愛姑は、この社会的環境と境遇において、完全に孤立無援である。愛姑の反抗意識が圧迫されて成長できなかったのは、当然であり、愛姑の屈服は歴史的悲劇である。それはちょうど旧民主主義革命の失敗が特定の歴史的条件に基づくことと同様であるとする。この小説には、①愛姑と嫁ぎ先の夫舅との矛盾、②莊木三と施家の矛盾、③莊氏の父娘の矛盾、が描かれる。しかし小説の主要な矛盾は、二つの思想を体現する双方の、すなわち民主主義思想（人権思想、女性の権利思想等）の萌芽を体現する愛姑と、七大人をはじめとする地主集団の封建主義思想との矛盾であるとする。

「封建主義に反対する歴史的責は新しい階級の指導する新しい革命によって完成されなければならない。これこそ魯迅がこの離婚事件の中で提起した、当時の中国の革命の方向と路線の問題である。」(111頁)^{*5}

上記のように、同論文は「離婚」の背景の時期を辛亥革命後として論を進める。しかし私は先に注2で述べたように、時期は清末と考える。この点を留保しながら、同論文について、後述のように考察していく。

3「重読魯迅『離婚』」（秦林芳、『中国現代文学研究叢刊』1994年第4期、1994・10）は次のように論ずる。愛姑は「旧中国の子女たち〔老中国的兒女〕」^{*6}の一人であり、その個性には近代民主主義の精神はなく、近代的個性主義は見られない。愛姑は古来の伝統的な「澁婦」〔きかん気の女。じゃじゃ馬〕にすぎない。（しかし愛姑の反抗は伝統的規範を無視した行動であり、それなりの歴史的合理性があったとする。）それゆえ愛姑の悲劇は基本的に性格悲劇である。そしてその反抗の目標は封建的色彩を帯び（「家敗人亡」）、封建的手段によって（七大人の公平な裁き）反封建の闘争を行おうとするものである。それゆえ魯迅は愛姑の闘争について二重の評価をする。

①封建勢力に対する自然発生的な野性に充ちた愛姑の闘争に対して、魯迅はいささかの留保もなく愛姑に同情する。「重読魯迅『離婚』」（前掲、1994・10）は許欽文の回憶を引用する。

「確か私が『離婚』の原稿に目をとおしているときに、魯迅先生は私がすでに《語絲》でこの小説を読んだことがあることを知って、ただ簡単に二三言いった。『この愛姑も、本来反抗性がある、いくらか闘うことができた。しかし《傷逝》の子君のように、まだ成長していず、暗黒社会の悪い勢力に抑えつけられてしまいました。』」（「祝福書」、許欽文、『《魯迅日記》中的我』、浙江人民出版社、1979・8）

そのうえで、「重読魯迅『離婚』」（前掲）は次のように指摘する。

「『呐喊』『彷徨』の一連の形象の中で、下層の勤労女性が立ちあがり反抗するものは愛姑一人しかない。魯迅はそれに対して深い同情を与えざるをえないものである。」（203頁）

②しかし同時に魯迅は、その反抗の封建的目標と封建的手段に対して批判をもっているとする。また、施家との対立の中で表われる、粗野で、横暴、浅はかで、悪辣な愛姑の一面は、魯迅が伝統的国民性の悪の現れとして極力批判したものである。このことが愛姑に対する魯迅の同情を限界づけているとする。

それゆえに同論文は次のように結論を述べる。

「これは魯迅の二重の悲哀を伝える。（一）封建勢力があまりにも強大であるとき、愛姑の闘争の失敗は不可避である。（二）たとえ愛姑の闘争が勝利を得るとしても、それは近代民主主義的意識の勝利とは無縁であり、同じく不幸なものたちに対して傷害を与え、自分の不幸の延長をもたらすことができるだけである。このために、強大な封建勢力と戦って勝利を得、近代民主主義の勝利を実現しようとするならば、〈思想革命〉、〈国民性の改革〉を引き続き行わなければならない。これが『離婚』の示す客観的な思想的意義と作者の主観的傾向であるのだろう。」（204頁）

二 先行研究に基づいて設定する課題

上記の先行研究における見解の分岐をどのように見たらよいのであろうか。

①愛姑の闘争は、封建的目標と封建的手段によるものであったのか。

②愛姑に、人としての覚醒（人権）の萌芽があるのか、どうか。あるいは愛姑の性格は、古来の「潑婦」にすぎないのか。

③「離婚」は歴史悲劇か性格悲劇か。

④愛姑の性格・思想に対して、物語の筋と構造からどのように読むことができるのか。またその性格・思想に対する魯迅の評価はどのようなものか。

⑤愛姑の闘争と敗北に対して、魯迅はどのように評価するのか。

上の分岐点について、まとめると次のようになる。

①②について

「辛亥の女兒」（須旅、前掲、1941・1）は愛姑の闘争が、自覚的な闘争ではなかったとする。

封建社会を改革するための展望のない、無自覚な自然発生的な闘争であった。しかしそこには人としての覚醒の萌芽があったとする。「説『離婚』」（呉組細、前掲、1985・1）は愛姑の闘争の軟弱さと目標のなさを指摘する。それは、当時の旧社会で初めて人権思想（民主主義思想の萌芽）をもった女性の弱点であるとする。それに対して、「重読魯迅『離婚』」（秦林芳、前掲、1994・10）はこの点を詳しく分析し、愛姑に近代民主主義思想、個性主義がないとし、彼女が古来の「澁婦」にすぎないとする。

前者二者は、愛姑に人としての自覚（人権思想）の萌芽を見る。それに対して後者は、愛姑を古来の「澁婦」にすぎないとする。

③について

以上の点から、「辛亥的女児」（須旅、前掲、1941・1）、「説『離婚』」（呉組細、前掲、1985・1）は「離婚」を歴史悲劇とし、「重読魯迅『離婚』」（秦林芳、前掲、1994・10）は性格悲劇と解釈する。

④について

「辛亥的女児」（須旅、前掲、1941・1）は愛姑の性格・思想における二重性を指摘する。称揚される野性的な性格と、闘争における自覚のなさである。「説『離婚』」（呉組細、前掲、1985・1）は愛姑の二重性を指摘する。それは一面における闘争の勇気と容赦のない暴露であり、他面における闘争の軟弱さと目標のなさである。「重読魯迅『離婚』」（秦林芳、前掲、1994・10）も二重性を指摘する。魯迅は愛姑の野性に充ちた闘争に深く同情した。他面において反抗の封建的目標と封建的手段に対して、また「澁婦」の粗暴な性格の側面に対して、批判するとする。このことが魯迅の同情を限界のあるものとする^{*7}。

いずれも愛姑の性格・思想における二重性を指摘していることが分かる。ただ、「重読魯迅『離婚』」（秦林芳、前掲、1994・10）は愛姑の「澁婦」の粗暴さ（伝統的国民性の悪）に注目し、魯迅の同情を限界づけるとする。

⑤について

「辛亥的女児」（須旅、前掲、1941・1）は、「離婚」が当時の農村女性の自然発生的な闘争・敗北と、農村の支配構造を、あるがままに描いたとする。「説『離婚』」（呉組細、前掲、1985・1）は「離婚」の主題を、民主主義思想（女性の権利思想等）の萌芽を体現する愛姑と、地主集団の封建主義思想の矛盾であるにとらえる。それゆえに「離婚」における愛姑の軟弱な闘争に対する諷刺を読む。「重読魯迅『離婚』」（秦林芳、前掲、1994・10）は、魯迅は愛姑（「澁婦」）の闘争が旧社会を改革する内容のものではなく、ゆえに旧社会変革のためにはなお、「思想革命」「国民性の改革」が必要であると考えたとする。

上の論文三本の分岐点を見てみると、私には物語の筋と構造の解釈によるだけでは解

決が難しい点があると思われる。そのため私は、「離婚」解釈の分岐点について、1925年当時の作者魯迅の民衆観、社会観、および当時の社会的状況に基づいて解釈を試みることにする^{*8}。①愛姑の性格・思想の二重性を認めたくえて、「重読魯迅『離婚』」（秦林芳、前掲、1994・10）の指摘する魯迅の伝統的国民性の悪批判（「澆婦」批判）を読むことが可能であろうか。②愛姑の闘争と敗北に対する魯迅の評価を考察するとき、その軟弱さに対する諷刺と、新しい階級の指導の教訓を、読みとることができるのであろうか^{*9}。

言い換えれば、私は次のように課題を設定する。

①魯迅の民衆観の変化・発展過程において、また当時の彼の社会観に基いて考えるとき、愛姑の性格・思想はどのように評価できるであろうか。愛姑の野性的な性格と闘争における自覚のなさという二重性を認めたくえて、魯迅は、愛姑をたんに「澆婦」（伝統的国民性の悪を發揮するきかん気の女）にすぎないとしたのか。それとも「澆婦」であるとしても、そこに人としての自覚の萌芽を見たのだろうか。また、1925年当時の魯迅の伝統的国民性の悪とは何を指していたのか（「澆婦」のような性格に対する批判だったのか）。

②愛姑の反抗・闘争と敗北を、魯迅の当時の社会観、当時の社会的状況に基づいてどのようなものとして位置づけることができるのか。また、魯迅は新しい階級（労働者階級）の指導を、1925年当時において予測することができたのだろうか。

Ⅱ 1925年頃の民衆観

一 伝統的国民性の悪批判

魯迅は1925年当時、中国変革の道はなお依然として、『新青年』で主張された「思想改革」（国民の精神的改革）を行うことに主要な課題があるとする。（その対象については当面、知識人であると考え、民衆は別的手段を考えなければならぬとした。）^{*10} 辛亥革命の挫折した頃から、『呐喊』の時期をへて1924年頃まで、魯迅の民衆観は「『人道主義』と『個人的無治主義』という二つの思想の起伏消長」（『魯迅景宋通信集』二四、1925・5・30、『魯迅景宋通信集』、湖南人民出版社、1984・6）の過程を構成する一環として、それぞれ深化をとめないながら、存在した。それは、「人道主義」を支える「素朴な民」（天性の愛と善をもつ）の存在と、「個人的無治主義」の憎悪の対象としての目覚めぬ麻痺した民衆（愚民）である。1924年2月「祝福」において、旧社会における「素朴な民」（祥林嫂）の不幸な人生を確認して以来^{*11}、「素朴な民」はそれ以後魯迅の作品に出現しなくなる。他方、精神の麻痺した目覚めぬ民衆は、「復讐」（1924・12・20、『野草』）、「復讐（其二）」（同上）、「長明灯」（1925・2・28、『彷徨』）、「示衆」（1925・3・18、『彷徨』）、「孤独者」（1925・10・17、『彷徨』）等々で引き続き描かれる。中国変

革にとって、国民の精神的改革（思想改革、伝統的国民性の悪の改革）こそ根本的な課題である、と魯迅は考えていた^{*12}。1925年頃、魯迅のとらえた伝統的国民性の悪とは何であったのだろうか。

「先生のお手紙は言っております。惰性が現れる形式は一つではない。最も普通なのは、第一は命を天に任せること、第二は中庸である、と。私は、この二つの態度の根本は恐らく、惰性だけですすますることはできないであろう、実は卑怯なのだと考えています。強者に会えば反抗する勇気もなく、『中庸』ということで誤魔化し、わずかな慰めとする。それゆえ中国人がもしも権力をもち、他人が彼をどうしようもないと知り、あるいは『多数』が彼の護符となるときがあれば、多くは強暴残忍で、あたかも暴君であって、ことを決するのに決して『中庸』ではない。口を開けば『中庸』になってみると、それは勢力をすでに失い、とくに『中庸』でなければいけなくなったときです。（中略）これらの現象は実際、中国人を廃滅させようのもので、外敵があらうと、なかろうと。もしもこれらを救い正そうとすれば、さまざまな劣った点を先行して暴露し、その立派な仮面を引き裂くよりしかたがない。」（『通訊（二）』、1925・3・29、『華蓋集』）

ここで魯迅は、中国の民族滅亡をまぢかな危機として意識し、この危機を脱するために、伝統的国民性の悪の代表的な一つである奴隷根性を、そしてその背後にある卑怯な精神を改めなければならないことを説いている。

「中国国民性の墮落は、決して家のことを気にかけるためではありません。彼らは〈家〉のために考慮したことはないと思います。最大の病根は目のつけどころが近く、さらに〈卑怯〉と〈貪欲〉なことです。しかしこれは長い間に培ったもので、一時には取りのぞくのが難しいです。私はこれらの病根を攻撃する仕事について、もしもするべきことがあれば、現在も手放そうとは思いません。しかしたとえ効果があるとしても、恐らく大変遅いので、自分では見ることができません。」（『魯迅景宋通信集』一〇）、1925・4・8、『魯迅景宋通信集』、湖南人民出版社、1984・6）

ここでも中国国民性の墮落を説き、その病根を目先の事に目をつけることと、「卑怯」「貪欲」をあげる。また、次のように魯迅は中国人が現実を正視しようとしぬ精神を指摘する。

「中国人のさまざまな方面を直視する勇気のないことは、隠すのと騙すことを用いるもので、奇妙な逃げ道を作りだして、自らは正しい道だと思いこむ。この道にあることが、国民性の怯懦、^{きょうだ}懶惰^{らんた}と、そして狡猾であることを物語る。（中略）事実において、いったん国が減びると、何人かの殉難する忠臣がつけ加えられる。後には人々はいずれも古いものを光復したいとは思わず、ただその数人の忠臣を賛美するだけである。」（『論睜了眼看』、1925・7・22、『墳』）

中国の現実がどのような状態にあるのか、そして自分自身の現状はどのようなものであるのか、を正視することが、中国変革の出発点であるとする。しかし中国人は卑怯にも現実に目をふさぎ、自己と他人を欺く事柄を考えだして、一時の安逸を貪ろうとする。

こうした伝統的国民性の悪を改革する仕事は、息の長い一世代二世代と引き継いで行かなければならないことかもしれない。しかし、「さいわい誰も決定的に言う勇氣はない、国民性は決して変わるはずがないものだ、と。」（「忽然想到 三」、1925・2・12、『華蓋集』）魯迅は上のような希望を抱いていた。「たとえ見いだすものが完全な暗黒にすぎないとしても、暗黒と闘うことができる。」（「忽然想到 十一」、1925・6・18、『華蓋集』）このように、魯迅は戦う姿勢を示している、それは「暗黒ともみあう」性質のものであったにしても^{*13}。

二 民衆に対する弁護の道

魯迅は1925年頃において、旧社会の下層の弱小者、苦しむ人々に同情していたと思われる。しかし同時に他方で、目覚めぬ麻痺した民衆（愚民〈下層の人々を含めて〉）を憎悪していた。また、この民衆は封建的専制支配の結果、「沈黙」の「死相」の中に沈んでいた。

「我々の大多数の国民はじつに静かである。まことに喜怒哀楽が色に表れず、まして彼らのエネルギーや熱情を吐露することなど言うまでもない。」（「中山先生逝世后一周年」、1926・3・10、『集外集拾遺』）

しかし目覚めぬ麻痺した精神が、沈黙の死相が、民衆の現実であるとしても、1925年頃から魯迅に、目覚めぬ麻痺した民衆を弁護する言葉がはじめて現れる。「俄文訳本『阿Q正伝』序及著者自叙伝略」（1925・5・26、『集外集』、『魯迅全集』第7巻、『魯迅全集』は1981年版による）は次のように言う。

「現在私たちが聞くことのできるのは、数人の聖人の徒の意見や道理で、それらは彼ら自身のためのものである。庶民については、むしろ黙々と育ち、やつれ黄色くなり、枯れ死にする、まるで大石の下の草のように。こうしてすでに四千年となる。」

（「俄文訳本『阿Q正伝』序及著者自叙伝略」、1925・5・26、前掲、82頁）

この文章で魯迅は、中国人がそれぞれ高い塀によって切り離され、互いの精神を通わせることができず、互いの精神的苦痛を感じることができない状況であるとする。と同時に、民衆がどうしてそのような状態にあるのかについて、大石の下に抑圧され、沈黙の中に枯れ死にする客観的状况を、比喩的に述べる。これは、大石の下に抑圧される民衆に対する弁護の言葉でもあると思われる^{*14}。また、「学界的三魂」（1926・1・24、『華蓋集続編』）では次のように言う。

「すこし大きく国事に喩えてみよう。太平の盛世には、匪賊が存在しない。群盗がい

たるところに発生するとき、旧史を見ると、必ず外戚、宦官、奸臣、小人が国政をつかさどっている。たとえ官話を大いにたぐってみても、その結果はやはり、『ああ、悲しいかな』の言葉である。この『ああ、悲しいかな』の前に、民衆（原文は小民——中井注）はたいてい相連れだつて盗賊となる。だから私は源増先生の話、『表面上、土匪や強盗にすぎないと見えるが、実際は農民革命軍である。』（《国民新報副刊》四三）ことを信ずる。それでは社会は進歩したのか。決してそうではない。（中略）農民は政権を奪取しようとしな。源増先生はまた、『四五人の熱心なものが皇帝を押し倒して、自ら皇帝中毒に浸っていくのにまかせておく』、と言う。（『学界的三魂』、1926・1・24、前掲、207頁）

ここで魯迅は、旧史に基づいて、世の中が混乱したときに、農民が盗賊になると言う。魯迅は、それが實際上、皇帝の支配を打倒する農民革命軍であるとする源増の意見に、賛意を示している。ただ、農民は自らの権力を打ち立てることをせず、新しい皇帝が出現するにまかせるとする。ここからすれば、魯迅は、皇帝の支配を覆す原動力としての農民の力を認めている。農民の反抗・闘争の力量を認めている。それは奴隷根性の発露ではない。

魯迅は子どもの頃を回想して次のように言う。

「年上のものの私に対する訓戒はこのように力があつた。そのため私も読書人の家の教えに従つた。息をひそめて頭を垂れ、いささかも軽拳妄動しない。両目は下の黄泉を見、天を見ることがあれば傲慢である。顔中に死相をよそおい、話したり笑つたりすれば無作法である。」（『忽然想到 五』、1925・4・14、『華蓋集』）

「ジェームス・ミルは、専制は人々を冷嘲に変える、と言つた。私たちの天下は太平であり、この冷嘲すらない。私は、暴君の専制は人々を冷嘲に変える、愚民の専制は人々を死相に変える、と思う。みんなは段々と死にいくが、かえつて自分は道を守るのに有効であると思ひこむ。（中略）

世の中でなお本当に生きていこうとする人がいるならば、先づ勇氣をもつて話し、笑い、泣き、怒り、打つのでなければならぬ。この呪うべき場所で呪うべき時代を撃退してしまわなければならない。」（『忽然想到 五』、1925・4・14、『華蓋集』）

封建的専制から脱するには、人々が沈黙の死相を捨てて本当に生きることが必要だとする。勇氣をもつて話し、笑い、泣き、怒り、打つのでなければならぬ^{*15}。

以上のように、1925年頃当時、魯迅は大石の下に抑圧される民衆を弁護するとともに、農民のもつ反抗・闘争の力量を認めるようになっていく。また、農村の女性愛姑はまさしく、同じように呪うべき場所と時代において、勇氣をもつて話し、泣き、怒る存在であった。たとえ愛姑が淫婦であるとしても、魯迅が伝統的国民性の悪として批判したものは、愛姑のような粗野（それは弱者に向けられたものとは言えない）ではない^{*16}。

魯迅の批判の矛先の方向は奴隷根性（封建体制における沈黙の死相）であり、卑怯な精神と貪欲であり、現実を正視せずに自他を欺く態度（阿Qの「精神勝利法」〈「阿Q正伝」、1921・12〉が典型的にあった）等であった。この意味で、魯迅の描く民衆の中で、愛姑ははじめて反抗し闘争する民衆の新しい類型であったと思われる^{*17}。

Ⅲ 1925年頃の社会観と女師大事件

一 「灯下漫筆」と「春末閑談」の社会観

1925年当時の魯迅の旧社会に対する見方を検討したい。

「私たち自身はとっくにきちんと配置している。貴賤があり、大小があり、上下がある。自分は人に虐げられるが、しかしまたほかの人を虐げることができる。自分は人に食われるが、しかしほかの人を食うこともできる。一段一段と掣肘^{せいちゆう}して、身動きすることができない。また身動きしたいとも思わなくなっている。なぜならばもしもちょっと動けば、利益はあるかもしれないが、しかし弊害もある。私たちはひとまず古人の優秀な方法と行為を見てみる。

『天に十日有り、人に十等有り、下の上に事える所以は、上の神に共する所以なり。故に王は公を臣とし、公は大夫を臣とし、大夫は士を臣とし、士は阜^{そう}を臣とし、阜は輿^うを臣とし、輿は隸を臣とし、隸は僚を臣とし、僚は僕を臣とし、僕は台を臣とす。』（《左伝》昭公七年）

しかし『台』に臣がないのは、あまりにも苦しいのではないか。心配する必要はない。彼よりもっと卑しい妻、もっと弱い子どもがいる。』（「灯下漫筆」、1925・4・29、『墳』）

「このような連鎖は、各々そのところを得ていて、敢えて非難するものがあれば、その罪名は分に安んぜずと言う。」（同上）

「このことから私たちの眼前で、なおさまざまな饗宴を自分の目で見ることができる。あぶり肉があり、フカヒレの宴席があり、日常の食があり、洋食がある。しかし茅葺きのもとに粗末な食事もあり、道ばたに残り物のつゆもあり、野には餓死者がある。あぶり肉を食う身代金をあがなえないほどの金持ちがおり、また飢えて死に瀕する一斤につき八文の子どもがいる（『現代評論』第21期を見よ）。いわゆる中国の文明とは実際、金持ちの食事ために人肉の饗宴を手配りするにすぎない。いわゆる中国とは、実際この人肉の饗宴を手配りする台所にすぎない。」（同上）

「この文明は、外国人を陶醉させたばかりではなく、またつとに中国のあらゆる人々を陶醉させずにはおかず、しかも笑いを浮かべさせるほどである。というのも古代から伝来し、今にいたるまで存続する多くの差別は、人々をそれぞれに分断し、ついに再びほかの人の苦しみを感ずることをできなくさせたからである。そして自分がそれ

どれほかの人を奴隷として使い、ほかの人を食う希望をもっていることにより、自分にも奴隷として使われ食われる将来が同じようであることを忘却する。そこで大小無数の人肉の饗宴は、文明が存在して以来現在にいたるまでならべられ、人々はこの会場で人を食ひ、食われ、凶暴な者の愚昧な歓呼によって、弱者の悲惨な叫び声を覆い隠した。女性や子どものことはさらに言うまでもない。

この人肉の饗宴は現在もならべてあり、多くの人にならべ続けたいと考えている。これらの人を食う者を一掃し、この宴席をすっかりかたづけ、この台所を打ち壊すことが、すなわち現在の青年の使命である。」(同上)

これが1925年当時、魯迅の見る旧社会の姿である。中国の伝統的旧社会は、上層から下層にいたるまで階層化されており、差別と分断によって、人は他人の苦痛を理解することができない。そのため、人は一段上層の者に苦しめられると同時に、一段下層の者を苦しめるという存在になる。一段上層の者からは奴隷としてあつかわれ、一段下層の者に対しては奴隷としてあつかう。このような存在が連珠のようにつらなるものであった。それは奴隷根性に基づく連鎖の制度である。

当時、この連鎖は上層の支配する金持ちと、救われようもなく虐げられる下層とに分離しつつある状態として描かれる。

「私たちの造物主——もしも天に本当にこのような『主人』がいるものとすれば——を恨めしくなる。一つは『支配者』と『被支配者』を永遠にはっきりと区別しなかったことを恨む。二つには支配者に腰ほそ蜂のような針をもたせなかったことを恨む。三つには、思想中枢を蓄えている頭を切りとつても、なお動く——服役する——ことができるように被支配者を造らなかつたことを恨む。三つのうち一つを得ることができれば、金持ちの地位は永久に堅固であり、統制支配も永久に気力を節約でき、そのため天下は太平である。」(「春末閑談」、1925・4・22、『墳』)

魯迅は、上層の支配者金持ちと下層の被支配者による、大きな二つの階層に分けて、旧社会の関係をとらえようとする事が分かる。『呐喊』の時期には、「抑圧者」と「被抑圧者」の関係は^{*18}、個人と個人の上下の連鎖の関係として、「苦しめる者」と「苦しめられる者」の連鎖の関係として、感性的にとらえられることが多かったと思われる^{*19}。このことと比較すると、ここでは大きな二つの階層の関係として、「支配者」層と「被支配者」層の関係がより明確にとらえられていると言える^{*20}。それは、社会科学的な分析ではなかつたにしても。そしてこれを覆すことが、新しい青年の使命であると考えた。しかし封建的支配層をどのように覆すのか、覆した後の社会はどのようなものなのか。こうした問題について、魯迅は当時答えることができなかったと思われる。さらには、それまで眼中になかつた軍閥政府を、現在の課題として打倒する必要があると痛切に考えるのは、1926年3月18日の三・一八惨案の後である^{*21}。

魯迅は、中国旧社会の人肉の饗宴を覆すこと、少なくともそれに反抗すること、闘争することが、新しい青年の使命であると考えた。もしそうであるとすれば、旧社会の封建的社会体制、倫理的支配体制に対する農村の弱者・女性の愛姑の反抗は、1925年当時の魯迅にとって肯定すべきものであったと思われる。たとえ現在から見て、愛姑の反抗の目標と手段が封建的な枠組みを脱却できていないものであるにせよ、またそれが敗北に終わったものにせよ、魯迅にとって、それは否定すべきことではなく、正視すべき現実である。

二 女師大事件における北京女師大学生の反抗・闘争

1925年当時、旧社会の構造（「抑圧者」と「被抑圧者」の連鎖の構造、さらには支配者と被支配者の階層が二分化した権力構造としてとらえつつあった）の理解を現実の中で検証し、さらに徐々に明確にさせていったものには、女師大事件における魯迅の経験があった。その旧社会の構造を精神的に支える奴隷根性の連鎖を断ち切り、学校当局と軍閥政府の抑圧に反抗し闘争したものは、北京女子師範大学の女子学生（知識人女性）である。

「私が中国女性の仕事ぶりを見たのは、去年に始まる。少数ではあるけれども、その熟練徹底した、幾度挫折してもくじけない気概を見て、かつてしばしば感嘆した。このたび弾雨の中で互いに助けあい、命を落とすことさえ顧みなかった事実〔1926年三・一八参案のこと〕は、中国女性の勇敢毅然さが、陰謀密計にあり、数千年にわたって抑圧を受けてきたにもかかわらず、結局失われることがなかった明証とするにたるものである。もしもこのたびの死傷者について将来の意義を尋ね求めるならば、その意義はここにあるであろう。」（「記念劉和珍君」、1926・4・1、『華蓋集続編』）

1925年の女師大事件の中で、魯迅は中国女性の仕事ぶりを見て、感嘆したと言う（ここで魯迅は「中国女性」と言い、中国の女子大学生とは言っていない）。小説「離婚」執筆の1925年11月6日前後において、女師大事件はほぼ北京女子師範大学学生の側の勝利の方向に向かいつつあったと思われる。8月、教育総長章士釗によって解散させられた女師大は、魯迅等の参加する校務維持会によって運営され、11月30日に復校する。当日、魯迅は女師大学生を率いて、宗帽胡同の仮校舎から石駙馬大街にある本来の女師大の校舎まで歩き、女師大回復の闘争の勝利を祝った。

魯迅はこの女師大事件において、現実社会の闘争に積極的に関与することになった。魯迅は、軍閥政府を後ろ盾とする女師大当局者に対して反抗し、女師大学生側に立って助力し戦い、また軍閥政府と結託した『現代評論』派知識人（陳源、徐志摩等）と熾烈な論争を行った。このことは魯迅の社会認識を、旧社会の権力構造の実態に対する認識を、改めて深めさせ、いわばその認識を量的に拡大したと思われる。（それを質的に深

化させたのは、1926年3月18日の三・一八惨案と思われる。）

この経験をとおして魯迅は、中国女性（女師大学生）の不屈の反抗と闘争に対する高い評価をもち、しばしば讃嘆した。このことを契機として魯迅は、「離婚」における農村女性の反抗を取りあげる意思をもつようになった可能性がある。その農村女性愛姑の反抗は、魯迅にとって初めての、民衆の反抗と闘争である。現実の旧社会の農村の中では、愛姑のような反抗は孤立無援の中で、封建勢力の包囲の中で、挫折せざるをえなかったと想像される。しかし魯迅における、反抗する農村女性、民衆の出現の意義は大きかった、と私には思われる。

封建的家庭の家長が子供の人格を認めず、ものとして取りあつかうように、女師大事件において校長楊蔭榆は「学校はなお家庭のごとし」^{*22}として、家長のように強権的に学生たちを取りあつかおうとした。施家が愛姑を取りあつかったように。さらに細かな点を取りあげれば、教育総長や女師大校長の側にたつて論陣を張り、権力と結託する『現代評論』派知識人がいる。小説「離婚」にも権力に諂う、「北京洋学堂」から帰ったばかりの知識人、下あごの尖った「少爺」（若旦那）がいる^{*23}。また女師大校長楊蔭榆は料亭で一部の教員を集めて話し合い、その翌々日、女師大自治会委員六名の除籍を決定した。施家が慰老爺を接待し、慰老爺は施家の意向を受けるように。こうした女師大事件と小説「離婚」における一連の類似は、女師大事件が小説「離婚」に反映した可能性を、私に想像させる。

Ⅳ 愛姑の性格・思想と反抗・闘争について

一 萌芽として

「重読魯迅『離婚』」（秦林芳、前掲、1994・10）の言うように、愛姑は「旧中国の子女たち」の一人である。愛姑の思想について言えば、近代的民主主義の思想をもっていないし、理解していない。しかし半纏足の事実がある^{*24}。（また、この村の近辺には「北京洋学堂」から帰ったばかりの少爺〔若旦那〕が存在する。）清末の進歩的思想の影響が村にも或る程度及んでいたと考えられる。愛姑の反抗の行為の中には、無自覚であるにしても、澁婦の性格であるとしても、人としての権利への目覚めの萌芽がある、と私は考える。すなわち沈黙の死相を打ち破った自然発生的な反抗・闘争の中に、人としての権利に目覚める思想の萌芽が現れている。これが当時の農村女性の現実の姿の一面であると思われる。

そして愛姑の反抗・闘争の形態について言えば、中国清末における「反抗の原初形態」^{*25}の萌芽と言える。たとえ愛姑の反抗の目標と手段が封建的な枠組みを脱却できていないものであるにしても、しかし封建的社会の支配体制、倫理的支配体制に対する民衆の反抗それ自体が肯定すべきものであった。澁婦にすぎないのではなく、澁婦の性

格であるとしても、そこに人としての目覚めの思想的萌芽があり、原初形態としての反抗がある、と私は考える。それゆえ、そこに性格悲劇の側面がないとは言えないが、しかし基本的には歴史悲劇である。

1925年末当時、魯迅の民衆観の変化と発展の過程から言えば、愛姑が沈黙の死相を突き破り、奴隷根性による封建的等級制度からはみだし、分に安んじようとしないふるまいと反抗は、肯定すべきものであった。女師大事件の経験によって（中国女性の力量を認めることによって）、また乱世における農民の反抗の力量を認めることによって、魯迅は中国農村の女性に対しても、わずかながらの曙光を見ていると思われる。

旧社会の農村において反抗・闘争して失敗する愛姑は、魯迅にとってまさしく当時の現実の姿であるととらえられた、と推測する^{*26}。魯迅は、1925年頃の段階では、中国の思想改革を重視し、啓蒙活動に力を注いだ。また、青年文学者、青年知識人の育成に献身的に努力した。しかし中国変革の筋道について、明確な展望がなかったと思われる。新しい階級（労働者階級）の指導を予測することはできなかったと思われる。しかしながら魯迅は、愛姑を抑圧する封建的支配の構造、封建的支配層に注視している。それは女師大事件において、認識を深めていった権力構造の姿から改めて深く学んだものである。封建的支配層は知識人（例えば北京洋学堂で学んだ若い知識人）と結託して農村女性の反抗を抑圧する。（1925年当時女師大事件において、封建的支配層は『現代評論』派の知識人と結託して、女師大学生側を抑圧した。）また、1925年頃、この『彷徨』の時期においては、「苦しめる者」と「苦しめられる者」の社会的連鎖の存在とともに、「支配者」層と「被支配者」層への二分化（金持ちと人肉の饗宴の材料）の認識が漸次深まりつつあった。「離婚」において、封建的支配層の階層としての姿は大変鮮明に出現する。

魯迅は、封建的支配層・支配体制に対する愛姑の反抗・闘争と失敗に同情している。その失敗は、清末当時のまぎれもない社会的現実と思われたであろう。それゆえ私は、封建的支配構造に対する魯迅の注視・批判を読むことができて、しかし愛姑の闘争の軟弱さに対する魯迅の批判を読むことができない。

小説「離婚」は愛姑の反抗の失敗をもって終わりを告げた。魯迅の民衆観は、「『人道主義』と『個人的無治主義』という二つの思想の起伏消長」（『魯迅景宋通信集』二四、1925・5・30、前掲）の過程を構成する一環から、その後どのように変化・発展の道をたどるのだろうか。魯迅は、「人道主義」を支える「素朴な民」（祥林嫂、「祝福」、1924・2・7）が、すでに旧社会における悲惨な運命をまぬがれないことを確認していた。また、「個人的無治主義」の憎悪の対象としての目覚めぬ麻痺した民衆には、弁護の道がわずかながらも用意されはじめる。その中で魯迅は、農民の反抗の力量を認めている。魯迅の民衆観が現れる作品の系譜から見れば、愛姑は初めて現れた、反抗・闘争す

る新しい民衆の類型である^{*27}。こうした民衆像を描いたことは、魯迅の民衆観にとって、『人道主義』と『個人的無治主義』（前掲、1925・5）の枠組みから脱却するための一つの踏み台になった意味があると思われる。それは、改めて中国旧社会の複雑な現状、豊かな現実の中から、民衆像、知識人像を虚心に探索する営為につながったと思われる。言い換えれば、それはその後の『朝花夕拾』（北京未名社、1928・9）における、改めて現実における民衆像、知識人像（あるいは自分の生き方）を探究する道を開いたものであると考える。魯迅は、1926年3月18日の三・一八惨案以後において、軍閥政府を現実警戒し打倒すべき権力として、位置づけるようになる。中国変革の根本的課題としての国民性の改革とともに、現実の権力構造の変革が、いま必要であることを理解する。

「離婚」が「狂人日記」「薬」「肥皂」とともに、『中国新文学大系 小説二集』（上海良友図書印刷公司、1935）に収められた理由は次の点にあると思われる。第一に、自ら認めるように、魯迅の作品の中では小説技術の優れた点があげられる。それとともに、第二に、「離婚」は愛姑の反抗・闘争する形象によって、従来の自らの民衆観の枠組みから脱皮するための営為を印しづけるものであった。第三に、1935年当時の魯迅の思想にとって、封建勢力に反抗する民衆の形象は好ましいものであると評価されたからであろう。（また、『自選集』〈上海天馬書店、1933・3〉にも、「肥皂」と「離婚」は収められている。）

二 「カインの末裔」（有島武郎著）^{*28}における反抗形態との比較

以下の事は蛇足となるものであろうが、しかしここにつけ加えたおくことにする。小説「離婚」と有島武郎の小説「カインの末裔」を比較し、愛姑と広岡仁右衛門^{*29}の反抗形態を比較したい。そのために、両者の筋を簡単に確認しておく。

愛姑は七大人に公正な裁きの幻想を抱いて、地主慰老爺の屋敷に行き、調停の話し合いに臨む。夫は寡婦と親密になり、愛姑に離婚を要求する。この三年間父親と兄弟の支援の下に、愛姑は意地で夫の家、施家の離婚の要求と戦ってきた。愛姑は慰老爺の広間で孤立無援となり、しかしなお自らの正当性を訴えようとする。しかし威圧に充ちた七大人の突然の、「来～～兮〔これ～～へ〕」の声に怯えて、すべての状況が急変したと思いきみ、自分の誤りだった考えて、七大人の斡旋を承諾する。

広岡仁右衛門は妻と赤子と馬一匹を引きつれて、北海道の晩秋に小作として、羊蹄山の麓の松川農場に入る。仁右衛門は自然人のように生命力の赴くままに行動する。厳しい自然条件の中で、彼は小作農業で金を稼ごうと懸命に働く一方、博打等で金をすってしまう。仁右衛門は粗暴な行為と規則破りで、小作の仲間の中で孤立する。彼は赤子を赤痢でなくし、草競馬で馬の足を折って廃物にしてしまう。仁右衛門は農場主に小作料を納めようとせず、管理人から立ち退きを迫られる。仁右衛門は函館の農場主の家を訪

れて、小作料軽減の交渉をする。しかし仁右衛門は農場主の家の宏大なたたずまい、家の中の立派な造り、部屋の装飾に気後れし、しどろもどろに小作料の軽減の話をするうちに、農場主に一喝され、引き下がる。その年、冬の吹雪の中を、仁右衛門は小屋に火をつけて、妻と二人で農場から出ていく。

ここにそれぞれの交渉の場面を引用しておきたい。

【「離婚」】

『『それじゃ私は命を投げだして、みんな破滅させてやります。』／『それは命をかけるようなことではない。』七大人はここでゆっくりと言った。『まだ年が若い。人はすこし穏やかでなければいけない。〈穏やかさが財を生む〉のだ。そうだろうが。わしは増やす額を十元と言うのだ。これはまったく〈天外の道理〉だ。もしそうでなければ、舅姑が〈出ていけ〉と言え、出ていかなければならぬ。府は言うにおよばず、上海北京であれ、外国であれ、こういうふうなのだ。もし信じないのなら、彼は北京洋学堂から帰ってきたばかりだから、自分で聞いてみるがいい。』そこで下あごの尖った少爺〔若旦那〕のほうに顔を向けて、『そうだろうが』、と言った。／『仰せのとおりです。』下あごの尖った少爺〔若旦那〕は急いで身体をまっすぐに伸ばし、恭しく低い声で言った。／愛姑は自分が完全に孤立したと思った。父は話をしようとしなないし、兄弟は来ようとしなかった。慰老爺はもともと彼らを手助けしているのだし、七大人も頼りにならない。あごの尖った少爺さえもひしゃげたナンキンムシみたいに、声を抑えて〈ごますり〉をしている。しかし彼女は混乱する頭の中で、最後の奮闘をしようとしたようである。／『どうして七大人様までが……。』彼女は眼いっぱい驚きと失望の光をたたえた。『そうです……。私は、自分たちが粗野な人間で、何も知らないと分かっています。父が人情や世故さえも分からず、老いぼれてしまったことを恨んでいます。〈老畜生〉〈小畜生〉〔舅と夫を指す〕のたくらみに乗せられてばかりです。あいつらは葬式の知らせでもするように、あわててこそこそもぐりこんで、取り入っているんだ……。』(中略)／彼女は身震いし、あわてて口をつぐんだ。というのも七大人が突然上のほうに両目を剥き丸い顔を挙げると同時に、細長い鬚に囲まれた口から長く波打つような大きな声が発せられたからである。／『これ〜〜へ』、と七大人は言った。／彼女は心臓が一瞬止まったと思い、それからときどき打ちはじめた。大勢はすでに去り、局面が一変したのだ。あたかも水の中に足を滑らせたかのようなのであるが、しかし実際これは自分の誤りのせいだと知った。／たちどころに青の長衣・黒のチョッキの男が入ってくると、手を垂れ腰をまっすぐにして、棍棒のようであった。／広間全体が〈物音一つせぬほどしんと静まりかえった〉。七大人は口をちょっと動かしたが、誰も何を言ったのか聞きとれなかった。しかしその男は、すでに聞きとって、しかもその命令の力が彼の骨の髄にまで浸みたように、身を二三度引きつらせ、〈身の毛がよだつ〉かのようなようだった。そ

して答えた。／『はっ。』彼は数歩引き下がり、身を翻して出ていった。／愛姑は意外なできごとが到来するであろうことを知った。それは予想できないことで、防ぎようもないことだった。愛姑はこの時やっと七大人には実際威厳というものがあって、先ほどは自分の誤解であり、そのためあまりにも身勝手に、あまりにも粗野であったことが分かった。彼女は非常に後悔して、思わず自分でこう言った。／『私はもともと七大人の言いつけどおりにするつもりで……。』広間全体は〈物音一つせぬほどしんと静まりかえっていた〉。彼女の言葉は糸のようにか細かったけれども、慰老爺は霹靂を聞いたかのようであった。彼は飛び上がった。『そのとおりに。七大人はほんとに公平だ。愛姑もよく分かってくれた。』（「離婚」）

【「カインの末裔」】

「やがて彼れは松川の屋敷に這入って行った。農場の事務所から想像してゐたのとは話にならない程ちがった宏大な邸宅だった。敷台を上る時に、彼はつまごを腕いでから、我れにもなく手拭を腰から抜いて足の裏を綺麗に押拭った。（中略）而して部屋の中は夏のやうに暑かった。／板よりも固い畳の上には所々に獣の皮が敷きつめられてゐて、障子に近い大きな白熊の毛皮の上に盛上がるやうな座布団の上に、はったんの襦袍を着こんだ場主が、大火鉢に手をかざして安座をかいてゐた。仁右衛門の姿を見るとぎろつと睨みつけた眼をそのまま床の方に振り向けた。仁右衛門は場主の一眼でどやし附けられて這入ることも得せずに透みしてゐると、場主の眼が又床の間からこっちに帰って来さうになった。仁右衛門は二度睨みつけられるのを恐れるあまりに、無器用な足どりで畳の上になにやら音をさせながら場主の鼻先までのそのそ歩いて行って、出来るだけ小さく窮屈さうに坐りこんだ。／『何しに来た』／底力のある声にもう一度どやし附けられて、仁右衛門は思わず顔を挙げた。場主は真黒な大きな巻煙草のやうなものを口に銜へて青い煙をほがらかに吹いてゐた。そこからは氣息づまるやうな不快な匂が彼れの鼻の奥をつんつん刺戟した。／『小作料の一文も納めないで、どの面下げて来臭った。来年からは魂を入れかへろ。而して辞儀の一つもする事を覚えてから出直すなら出直して来い。馬鹿』／而して部屋をゆするやうな高笑が聞こえた。仁右衛門が自分でも分からない事を寝言のやうにいふのを、始めの間は聞き直したり、補ったりしてゐたが、やがて場主は堪忍袋を切らしたといふ風にかう怒鳴ったのだ。仁右衛門は高笑ひのくぎり毎に、たたかれるやうに頭をすくめてゐたが、辞儀もせずに夢中で立上がった。彼れの顔は部屋の暑さの為めと、のほせ上がった為めに湯気を出さんばかり赤くなつてゐた。／仁右衛門はすっかり打摧かれて自分の小さな小屋に帰った。彼れには農場の空の上までも地主の頑丈さうな大きな手が広がってゐるやうに思へた。（中略）何んといふ暮しの違ひだ。何んといふ人間の違ひだ。親方が人間なら俺れは人間ぢやない。俺れが人間なら親方は人間ぢやない。彼れはさう思った。」（「カインの末裔」）^{*30}

両者を比較してみると、次のような類似点がある。①封建的地主（あるいは農場主）の支配する農村を小説の舞台とすること、②主人公の人物像において強い生命力に溢れたふるまいと、粗暴な面（あるいは粗野な面）が描かれていること。③両者は反抗心に富み、支配層、伝統的習俗に対して反抗するが、しかし孤立する。（「聖者と山賊」〈青木保、『反抗の原初形態』、ホブズボーム、青木保訳、前掲）に基づけば、愛姑と仁右衛門は報復者のタイプへと発展する可能性をもつ萌芽であろう。愛姑の矛先は嫁ぎ先に向かい、仁右衛門の矛先は同じ小作仲間に向かう。）④直接の話し合いの場において、封建的支配勢力（七大人、農場主）の威圧に屈服し、引き下がる。

この「カインの末裔」が何らかの影響を与えたのかどうか、私にはいまほかの資料がなく、保留するしかない。ただ、もし魯迅が「カインの末裔」を読んだ事があるとすれば、上記の仁右衛門の屈服の場面は、魯迅に何らかの暗示を与えた可能性があると考えられる。

愛姑の敗北について、例えば「『離婚』的叙事分析及其文化意蘊」（袁盛勇、張桂芬、前掲、2003・5）は権威崇拜心理による愛姑の奴隷への帰順を指摘する。しかしそれは、愛姑の一連の反抗経過を軽視する評価である（富裕な自作農の父親と兄弟の支援のもとでの反抗であったにしても）、と私には思われる。私は愛姑の屈服に奴隷への帰順の側面を強調することができない。仁右衛門の屈服に奴隷性の側面を強調できないのと同様に。彼らの反抗は、それぞれの国と時代における、反抗の原初形態の萌芽であると考ええる。

魯迅は、愛姑の思想面から言えば、人としての権利に目覚める萌芽をもつものであることに注目し、反抗の形態から言えば、反抗の原初形態の萌芽であることに注視したと考える。たとえ愛姑の性格に粗野な滌婦の面があるとしても、そしてその反抗の原初形態の萌芽が旧社会の中で敗北せざるをえない運命であるとしても、またそれが目標と手段を誤って選択しているとしても、魯迅は、人としての権利に目覚める思想の萌芽を肯定し、封建的支配層に対する反抗の原初形態の萌芽としての価値を肯定して、この小説に描いた、と私は考える。

このように見てくると、私は愛姑の性格・思想および反抗・闘争について、須旅の見解に基本的に賛成していることになる。小論はその根拠を、1925年当時の魯迅の変化・発展する民衆観、そして当時の社会観、女師大事件の経験等に求めて論じたものである。

*1：私が目をととした小論の主題に関する論文は次のものにとどまる。以下適宜に、小論の中で具体的に言及することにする。

〔中国語文献〕

①「辛亥の女児——1925年の『離婚』」、須旅、『魯迅研究叢刊』第1輯、魯迅文化出版社、1941・1、

『魯迅研究學術論著資料匯編 1913-1983』第3巻、中国文聯出版公司、1987・3

- ② 「『離婚』」、許傑、『魯迅小説講話』、泥土社、1951、『魯迅卷 第六編』、中国現代文学社
- ③ 「中国反封建思想革命的鏡子——論『呐喊』『彷徨』的思想意義」、王富仁、『中国現代文学研究叢刊』1983年第1輯、1983・3
- ④ 「『離婚』与『小公務員の死』的比較分析」、林興宅、『魯迅研究』（双月刊）1983年第3期、中国科学出版社、1983・6・15
- ⑤ 「説『離婚』」、呉組細、『中国現代文学研究叢刊』1985年第1期、作家出版社、1985・1
- ⑥ 「刻劃深切、技巧円熟之作——論《肥皂》《離婚》」、范伯群、曾華鵬、『魯迅小説新論』、人民文学出版社、1986・10
- ⑦ 「論『離婚』——兼談伝統与“拿来”」、孫昌熙、韓日新、『文史哲』1987年第6期、山東人民出版社
- ⑧ 「論魯迅小説創作的無意識趨向」、藍棣之、『魯迅研究動態』1987年第8期、北京魯迅博物館
- ⑨ 「為愛姑一辯」、葛中義、『魯迅研究動態』1988年第2期、北京魯迅博物館、1988・2・20
- ⑩ 「論『離婚』在魯迅小説創作中的意義」、林志浩、『魯迅研究』（下）、中国人民大学出版社、1988・6
- ⑪ 「第7章 客観的描述の主観浸透」、汪暉、『反抗絶望——魯迅的精神結構与《呐喊》《彷徨》研究』、上海人民出版社、1991・8
- ⑫ 「重説魯迅『離婚』」、秦林芳、『中国現代文学研究叢刊』1994年第4期、作家出版社、1994・10
- ⑬ 「第14章 『離婚』芸術技巧の得失」、林非、『中国現代小説史上的魯迅』、陝西人民教育出版社、1996・9
- ⑭ 「『離婚』的敘事分析及其文化意蘊」、袁盛勇、張桂芬、『魯迅研究月刊』2003年第5期、2003・5・30

〔日本語文献〕

- ① 『反抗の原初形態』、ホブズボーム著、青木保編訳、中央公論社、1971・1・25
 - ② 「『カインの末裔』論」、上杉省和、『有島武郎——人とその小説世界——』、明治書院、1985・4・25
 - ③ 「魯迅作品『離婚』論」、永井英美、『日本中国学会報』第57集、2005・10・8
 - ④ 「『カインの末裔』と『阿Q正伝』」（康鴻音、『近代の闇を拓いた日中文学——有島武郎と魯迅を視座として——』、日本僑報社、2005・12・28）
 - ⑤ 「女の描き方——『離婚』を中心として」、代田智明、『魯迅を読み解く』、東京大学出版会、2006・10・10
- *2：「辛亥の女兒——1925年の『離婚』」（須旅、『魯迅研究叢刊』第1輯、魯迅文化 出版社、1941・1、『魯迅研究學術論著資料匯編 1913-1983』第3巻、中国文聯出版公司、1987・3）は、後の「離婚」研究に比較的大きな影響を与えたとされる。同論文は、「離婚」の背景となる時期について、「辛亥革命後」あるいは「辛亥革命前後」と言及する。しかし「辛亥の女兒」という題名の影響のためであろうか、中国のその後の研究論文では、「離婚」の背景の時期を辛亥革命後しばらくの時期と理解して論ずる論文がある（「『離婚』」〈許傑、前掲、1951〉、「説『離婚』」〈呉組細、前掲、1985・1〉、「論『離婚』——兼談伝統与“拿来”」〈孫昌熙、韓日新、前掲、1987〉）。「魯迅作品『離婚』

論」(永井英美、前掲、2005・10)は、根拠をあげていないが、「清末民初らしい」とする。私は以下の理由から、清末と考えたい。①清朝の官職「知県」が存在している。また「府」にも言及される。辛亥革命後は、府、州、が廃され、県だけが設けられて、「県知事」が置かれた。②「北京洋学堂」(新学を主として教える「洋学堂」として、1862年設立された京師同文館は洋務派が設立した洋学堂であるとされる。1898年開学する京師大学堂も洋学堂と称せられた。これらのいずれかを指す可能性がある)は、清末の時代に存在するものである。また、「少爺〔若旦那〕」は「北京洋学堂」から帰ったばかりとされており、「離婚」の事件が進行しているとき、「北京洋学堂」はなお存在している可能性が高い。③小説の背景を辛亥革命の後に特定する根拠が見つからない。以上のことから、私は、小説の背景の時期を清末と理解する。

*3:『「離婚」』(許傑、『魯迅小説講話』、泥土社、1951、『魯迅卷 第六編』、中国現代文学社)は次のように指摘する。「何幹之先生はかつてこの文章を研究し、愛姑を『辛亥的女兒』と言った。」ここからすると、「須旅」は何幹之の筆名である可能性が高い。

*4:「重読魯迅『離婚』」(秦林芳、『中国現代文学研究叢刊』1994年第4期、1994・10)

*5:「論『離婚』在魯迅小説創作中的意義」(林志浩、前掲、1988・6)は次のように指摘する。愛姑は祥林嫂と同じように夫権の犠牲者であるが、しかし強烈な反抗性をもち、近代社会の男女平等思想の萌芽をそなえていた。しかし愛姑の勇敢さと決然さには、自然発生性と盲目性があった。女性を圧迫する夫権が封建的制度、封建的社会勢力であることを理解しなかった。そのため封建勢力の代表七大人に対する幻想をもっていた。林志浩は、被抑圧女性の解放が、単純な女性解放の問題であるばかりでなく、複雑な社会解放の問題であるとする。小説「離婚」は、被抑圧人民と女性が封建的宗法の思想と制度から解放されるためには、闘争の矛先を、地主階級を代表とする封建的政権に向けなければならないことを、示しているとする。

「論『離婚』——兼談伝統与“拿来”」(孫昌熙、韓日新、『文史哲』1987年第6期、山東人民出版社)は、愛姑が近代的自我意識(その萌芽ではなく)をもち、一人の人間としての意志と行動を戦いとうろろとすると論ずる。しかしこの判断には具体的根拠が示されていず、にわかには従いがたい、と私には思われる。

*6:「魯迅論」、茅盾、『小説月報』第18巻第11号、1927・11・10、『茅盾全集』第19巻、人民文学出版社、1991

*7:『「離婚」的叙事分析及其文化意蘊』(袁盛勇、張桂芬、前掲、2003・5)は、『魯迅伝』(林志浩、北京十月文芸出版社、1991・7(増訂本))における、「彼女にはすでに近代社会の平等思想の萌芽があって、その追求したのもも分不相応なものではなく、夫と平等に暮らす愛情であった。」とする点に反駁し、テキストの叙事分析を行うとする。その結果、次のように論ずる。愛姑は、小畜生、七大人と同じ思考方式をもち、権威崇拜の心理をもっていた。夫の家と騒ぎを起こしたのは、たかだか粗野な農婦のきかん気の行為にすぎない。権威者七大人の判定に従うのは、愛姑が帰順した奴隷であることを示す。これは魯迅が解剖した国民性の一つであるとする。

しかし私は、含意された作者が、このきかん気の行為に注目したのは何故なのだろうかと考ええる。愛姑の反抗が粗野な農婦のきかん気の行為にすぎない、そして愛姑が帰順した奴隷にすぎない、と考えると良いのかどうか、魯迅の民衆観の変化・発展の過程において考えてみたい。

「論魯迅小説創作的無意識趨向」(藍棣之、前掲、1987・8)は、愛姑の闘争を次のように論ずる。「封建的礼教に対して骨の髄から憎んだ〈五四〉運動の先駆者が、二十年代中頃無礼で粗野な女性が封建的請負結婚を維持するために死にものぐるいに闘争するのを称揚する作品を書い

た、ということがどうして考えられようか。愛姑のような結婚の観念と性癖は、決して愛すべきものではない。彼女の性癖、やり方は、新旧の道徳に対して、いずれも受け入れようがないものだ。」

この論に対しては、「為愛姑一辯」（葛中義、『魯迅研究動態』1988年第2期、北京魯迅博物館、1988・2・20）が詳細に論駁する。例えば次のように言う。

「實際、彼女は早くから自分の闘争の目的を述べている、『でもあくまであちらへ戻ろうとは考えません』、『私は意地なんです』。いわゆる意地とは、実はもう二度と声を低め頭をさげ押さえつけられた生活に耐えたくない、ということである。彼女は反抗を求め、人としての権利をもつことを求める。彼女が離婚を承知しないのは、事態がこのようにたやすく解決できない、彼女を押さえつけた人に得をさせることはできない、と考えるからである。我々はまさか、軽々しく彼女に封建的請負結婚を維持しようとする心があったとすることができるのであろうか。」

「第14章 『離婚』 芸術技巧の得失」（林非、『中国現代小説史上の魯迅』、陝西人民教育出版社、1996・9）は、愛姑が奴隷根性とはあまり合わない非凡な野性をもっていることを認める。しかし愛姑の目標は封建的結婚のもとで虐待される奴隷的地位（正統な地位）を戦いとうとしただけであるとする。魯迅の一貫した目的は、封建主義思想の支配の強大であることを暴くことにあったとする。

しかし私は、当時の旧社会の農村で、封建的思想の支配が強大な中で反抗する愛姑の意味を、魯迅の民衆観の変化・発展の過程に基づいてもう少し考えてみたい。

*8：なお、主として物語構造に基づいて「離婚」を解釈するものに、「第7章 客観的描述の主観浸透」（汪暉、前掲、1991・8）、「魯迅作品『離婚』論」（永井英美、前掲、2005・10）がある。

「第7章 客観的描述の主観浸透」（汪暉、前掲、1991・8）は次のように指摘する。

「外在する情勢の発展の中で、愛姑が、話筋がとおり勢いのある状態から孤立と怯懦へ、驚きと絶望から声を低くしへりくだるところへ、最後の抵抗から屈服を余儀なくされる全心理過程を、直接観察的に、論理的に筋をとおして提示している。ここにおいて、とりわけ演劇的対話の応用を指摘しなければならない。阿契尔は次のように言う。『どの対話も、もしも本当に演劇的であるならば、個別の人物の運命における過去と現在、将来に対して、ある種の態度を示さなければならない。』性格化した言葉の中に情勢の言葉を含ませなければならない。愛姑と七大人、そのほかの登場人物の対話は、この演劇的対話の模範であると言うことができる。」（「第7章 客観的描述の主観浸透」、汪暉）

同論文は物語の構造分析を行い、演劇的対話の優れていることを指摘する。

「魯迅作品『離婚』論」（永井英美、前掲、2005・10）は次のように指摘する。

「古い農村社会の女性である愛姑が、婚姻問題を巡ってどこまで『意地』（原文『賭氣』）を通せるか、これがすなわち本作品で愛姑が突きつけられている問いである。」（195頁）

「もしも愛姑の罵詈雑言によるパフォーマンスが行われなかったら、この作品は盛り上がりがない評論か新聞記事のようになってしまわないか。作品はここをめぐって書かれてきた。魯迅はこの場面を導かんとして愛姑を追い詰めたのである。」（199頁）

「しかしこの一刹那、七大人は愛姑によって、彼女の土俵まで引き摺り下ろされたとは言えないか。追い込まれた愛姑の、窮鼠猫を噛む奮闘の結果、文字を知る階層の理屈っぽい言葉の限界が、ここでほんの一瞬であるが、あらわにされた、と言えないか。そして魯迅は結局まさにそのために愛姑を追い詰めたのではないだろうか。」（201頁）

このように「魯迅作品『離婚』論」（永井英美、前掲、2005・10）は、物語構造の分析に基づき、慰老爺の広間における愛姑の罵詈雑言によるパフォーマンスに焦点をあて、この場面に魯迅の意図がこめられているとする。

上記の二論文の内容を興味深く読むと同時に、私は自分の課題として物語の外の、魯迅の状況に基づいて解釈を試みたい。

*9：「刻劃深切、技巧円熟之作——論《肥皂》《離婚》」（范伯群、曾華鵬、前掲、1986・10）は、「離婚」が抗争者愛姑を解剖したものと捉え、愛姑の敗北の原因を探る。愛姑は勇猛果敢である一面をもっていた。しかし敵に対する軽視と幻想が愛姑の精神的足かせとなっていた。これが愛姑の惨敗の主要な原因とする。魯迅の意図は、愛姑の失敗が青年改革者に対して警鐘・教訓を与えることにある、ととらえる。

*10：「通訊（一）」（1925・3・12、『華蓋集』）で魯迅は次のように言う。

「私は、現在の方法は最初にやはり何年前『新青年』ですすでに主張された『思想革命』を用いなければならないと思う。いまだにこの話であるとは悲しむべきことかもしれないが、しかしこれ以外にほかの方法はない、と私は思う。しかも『思想革命』の戦士を準備するのは、なお現在の社会とは関係がない。戦士が養成されるのを待って、そこでもう一度勝負を決めるのです。」

また、「通訊（二）」（1925・3・29、『華蓋集』）では、先ず知識人から方法を講じ、民衆は将来を待って考えることを言う。

*11：「魯迅『祝福』についてのノート（1）——魯迅の民衆観から見る」（『南腔北調論集』、東方書店、2007・7）

*12：「『魯迅景宋通信集』八」（1925・3・31、前掲）で魯迅は次のように言う。

「最初の革命は排満で、やり遂げるのが容易なことでした。その次の改革は、国民に自分の悪い根性を改革するよう求めることで、そこで国民は聞き入れなくなったのです。だからこの後最も大切なのは、国民性を改革することです。さもなければ、専制であろうと、共和であろうと、何であろうとも、看板は変わったけれども、品物は元のとおりというのではまったくだめです。」

*13：「『魯迅景宋通信集』二四」（1925・5・30、前掲）で魯迅は次のように言う。

「私の言う話は、いつも考えているところと違います。なぜこのようであるかについては、『呐喊』の序で述べたことがあります。自分の思想を他人に伝染させることを願っていないからです。なぜ願わないのか。私の思想が暗すぎるからですし、自分でも結局のところそれが正しいのかどうかを確認できないからです。〈なお反抗しようとする〉ことについては、本当です。あなたの反抗は、光明の到来を希望するためでしょう（私はきっとそうだと思います。）しかし私の反抗は、むしろことさら暗黒ともみあうことにすぎません。」

*14：「摩羅詩力説」（1908年発表、第5章）で魯迅はバイロンの一面を次のように紹介する。

「もしも奴隷がその前に立てば、必ず真心から悲しみつつ、憎悪をもって見た。真心から悲しんだのはその不幸を悲しんだからであり、憎悪をもって見たのはその戦わないことからであった。」

これは民衆が束縛され掣肘されている歴史的社会的諸条件を無視して、奴隷であることも個人の問題、意志の問題に還元するものである。しかし1925年の本文の言及においては、「大石の下」という比喩的な表現ではあるが、民衆が抑圧された社会的歴史的状況を述べる。

*15：魯迅は、「無声の中国」（1927・2・18、講演、『三閑集』）で次のように言う。

「青年はまず中国を声のある中国に変えることができる。大胆に話し、勇敢に行い、あらゆる利害を忘れ、古人を押しつけて、自分の真心からの話しを語るのである。」

- *16：例えば愛姑は、自分を気ままに取りあつかおうとする舅と夫を「老畜生」「小畜生」と呼ぶ。魯迅は「并非閑話（三）」（1925・11・22、『華蓋集』）で、女師大事件のさなかに、流言を流すものを「畜生」と呼んだ。

「こうした〈流言〉は、作るものが一人なのか、それとも多数なのか。姓を何と言い、名は誰なのか。私はいつも探しだすことができない。のちには、多くの暇がないために、それ以上調べ確かめることはしなかった。ただ叙述の便宜のために、これを畜生と総称する。」

「畜生」という言葉は粗野であるけれども、愛姑の矛先は抑圧しようとする封建的家長に向けられたものであり、魯迅の矛先は流言を流す卑劣な封建的支配層に向けられたものである。

- *17：五四運動における学生に対する評価は、その直後においてはむしろ、運動をする学生等に伝統的国民性の悪の発現を見て（「忽然想到 七」、1925・5・10）、この運動は中国に何の影響もないとした（宋崇義宛て書簡、1920・5・4）。しかし五四運動について、後に評価を変えている。「どうして五四運動が改革でなかっただろうか。」（『出了象牙之塔』後記、1925・12・3）。五・三〇事件においては、運動する学生に対してではなく、それを傍観する人々に批判の矛先を向ける。「学生が行いするのは、先ず演説、デモ行進、宣伝の類であって、まさに火花のように、民衆の心の火をつけ、彼らの光芒を引きおこし、国勢にいくらかの転機をもたらすことである。もしも民衆に可燃性がないのならば、火花は自身を燃やしつつすよりしかたがない。（中略）『五分間熱』は場所の病であって、学生の病ではない。これは学生の恥辱ではない以上、全国民の恥辱であることになる。（中略）外国人は非難するにあたらぬ。しかし本国のほかの冷然とした民衆、権力をもつ者、懐手の傍観者も、事後に嘲笑しようとする。実に無恥でほんくらだ。」（「補白 三」、1925・7・8、『華蓋集』）

1925年の五・三〇事件以後の段階では、魯迅は戦い孤立する学生に同情し、「冷然とした民衆、権力をもつ者、懐手の傍観者」が事後に運動を嘲笑することを非難する。

- *18：「祝中俄文字之交」（1932・12・30、『南腔北調集』）に魯迅は次のように言う。

「そのときロシア文学は私たちの指導者そして友人であることを知った。なぜならそこから被抑圧者の善良な魂、苦しみ、もがきを見つけたからである。さらに四十年代の作品とともに希望を燃やし、六十年代の作品とともに悲哀を感じとった。私たちは当時の大ロシア帝国もまさに中国を侵略したことを知らなかっただろうか。しかし文学からは一つの大きな事、世界には二種類の人、抑圧者と被抑圧者があることを理解した。

今から見てみると、これは誰もが分かっている、言うまでもないことだ。しかしその当時には大発見であり、古人の火を見つけたことが、暗夜を照らし、ものを煮ることを可能にしたことにまさに匹敵した。」

- *19：このことについては、「魯迅の〈明〉について——とくに初期文学活動を支える思想と1918年頃の〈明〉について」（『名古屋大学中国語学文学論集』第1輯、1976・9、『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1〉の第1章に当たる）で述べたことがある。

- *20：「十四年の『読経』」（1925・11・18、『華蓋集』）で魯迅は次のように言う。

「私は現在の金持ちが聡明な人であると信じている。逆に言えば、もしも正直であれば、必ずや金持ちになることはできないということである。掲げる看板が仏教であるか、孔子の道であるかについては、何の関係もない。（中略）彼らは文盲の節婦、烈女、華工〔欧州大戦に参加

した中国人労働者] に比べて聡明である。」

ここで魯迅は、現在の金持ち（支配層）が聡明であるとし、正直であれば金持ちになれないとする。他方で、節婦、烈女、華工という過酷な運命を強いられた文盲の下層の民衆（被支配層）の運命に言及する。

*21: このことについては、「魯迅の復讐観について」（『野草』第26号、1980・10・31、『魯迅探索』〈汲古書院、2006・1〉の第3章に当たる）で述べたことがある。

*22: 「楊校長致全体学生公啓」（1925・5・9、『魯迅生平史料匯編』第3輯、天津人民出版社、1983・4）

*23: これは邪推にすぎないかもしれないが、当時の論敵の一人、若い知識人徐志摩（1897-1931）の肖像写真を見ると、下あごの尖った貴公子のようである。

*24: 前述のように、「説『離婚』（呉組細、前掲、1985・1）は「鎌式」の足を半纏足と理解している。魯迅は、「這個与那個」（1925・12・8、『華蓋集』）で次のように言う。

「例えば祖母の足は三角形で、歩行が困難である。小さな娘の足は自然の足で、飛ぶように走ることができる。」

ここでは纏足の足を「三角形（原文、三角形）」とする。「鎌式」の足とは纏足ではなく、「説『離婚』（呉組細、前掲、1985・1）のように半纏足であると理解する。

*25: 『反抗の原初形態』（ホブズボーム著、青木保編訳、中央公論社、1971・1・25）の「聖者と山賊」（青木保著）によれば次のように言う。ホブズボームは、山賊行為を、組織化された社会的反抗の原始的形態だと見なしている。農民は山賊を社会的反抗の代弁者と見なし、山賊を守る。社会的権威は常にその存在を犯罪者と見なす。山賊はあくまで農民社会にとどまる。社会的山賊にとっては、農民の収穫物を略奪することなどは思いもよらない。山賊が輩出するのは、部族的親族組織的基盤に立つ社会と近代資本主義的産業社会との間に位置する段階にある社会である。ホブズボームは、社会的山賊の型を三つに分類する。一つは高貴泥棒ロビン・フッド的タイプ、第二は原始的な抵抗を試みる闘士・ゲリラのタイプ、三つめには恐怖の的となる報復者のタイプである。こうした反逆者山賊は、たとえ勝利を見ても、彼らの破壊の誘惑は止まない。これら原始的な農民騒動は積極的建設的な社会計画を持っていない。彼ら社会的山賊に共通するものは、社会的な意味では、革命家ではなく、改革者であり、時には伝統主義的な革命家になる。彼らは社会的不平等や不正を糾す存在であるが、その範囲は農民社会の保守主義的な道德律の枠の中にとどまる。

*26: 「這個与那個」（1925・12・20、『華蓋集』）で魯迅は次のように言う。

「中国には失敗の英雄が少ない、粘り強い反抗が少ないし、敢えて単身で苦戦する武人が少ないし、敢えて叛徒を悼み泣く甲問客が少ない。勝利の兆しを見れば紛紛として集まり、敗戦の兆しを見れば、入り乱れて逃げる。武器が我々より優れた欧米人、武器が必ずしも我々より優れていない匈奴蒙古満洲人は、いずれも無人の境にはいるかのようであった。（中略）私は運動会を見るとき、いつもこう思う。優勝者はもとより尊敬すべきである。しかし落伍しているがなおゴールまで走ろうとする競技者と、このような競技者を見て肅然として笑わない観客が、まさしく中国の将来の背骨である。」

愛姑の反抗の失敗は、魯迅にとって批判すべきものではなかったと思われる。

*27: 祥林嫂（「祝福」、1924・2・7）は再婚に必死に抵抗して、額を香炉机につつけ、自殺を図る。これは純朴な心によって、むしろ伝統的な習俗（「従一而終」）に従おうとしたための抵抗と思わ

れる。これに対して愛姑の反抗は、封建的社会的支配体制、倫理的支配体制に対する反抗、すなわち伝統的習俗に対する反抗であった。この点から、私は愛姑を魯迅の民衆観における新しい類型と考える。

*28:「カインの末裔」(『新小説』第22年第8号、春陽堂、1917・7、『カインの末裔』(『有島武郎著作集』第3輯、新潮社、1918・2))は、魯迅によって目をとおされた可能性があるのだろうか。『現代日本小説集』附録関于作者的説明(『現代日本小説集』、上海商務印書館、1923・6、『魯迅全集』第10巻、1981)は次のように言う。

「1910年頃雑誌『白樺』が発刊され、有島はそこに寄稿して、だんだんと世に知られる。この数年来作品を編集して『有島武郎著作集』とし、現在まですでに第14輯まで出している。創作に対する彼の要求と態度について、『著作集』第11輯に〈四つの事〉という文章があり、概略説明している。(中略)

〈小さき者へ〉(Chisaki mono e)は『著作集』第7輯に見える。またローマ字日本小説集にも取められる。

〈お末の死〉(Osue no shi)は『著作集』第1輯に見られる。

ここから、魯迅が『有島武郎著作集』(全16輯。1917-1923。第1輯から第5輯まで、新潮社刊。第6輯から叢文閣刊となる)の中で、『死』(『有島武郎著作集』第1輯、新潮社、1917・10・18、初版。私が見た本は、1919・6・15、第19版、所収作品は、「お末の死」「死と其前後」「平凡人の手紙」)、『小さき者へ』(『有島武郎著作集』第7輯、叢文閣、1918・11・9。私が見た本は、1919・6・5、第17版、所収作品は、「An Incident」「幻想」「小さき者へ」「潮霧」「死」を畏れぬ男」「動かぬ時計」「老船長の幻覚」)、『惜みなく愛は奪ふ』(『有島武郎著作集』第11輯、叢文閣、1920・6・5、初版、所収作品は、「惜みなく愛は奪ふ」「四つの事」「芸術家を造るものは所謂実生活にあらず」「想片」「大なる健全性へ」「自己と世界」「批評といふもの」「若き友の訴へに対して」「美術鑑賞の方法に就て」「美術鑑賞の方法に就て再び」「芸術を生む胎」)に目をとおした可能性が高いことが分かる。また、『カインの末裔』(『有島武郎著作集』第3輯、新潮社、1918・2・20、初版。私が見た本は、1919・9・20、第18版、所収作品は、「カインの末裔」「凱旋」「実験室」「クララの出家」)には「カインの末裔」が取められている。上記の「関于作者的説明」(前掲)の内容を見てみると、魯迅は1923年当時、『有島武郎著作集』第14輯まで何らかの形で知っていたと考えられる。

以上の状況を考えて、魯迅が「カインの末裔」にも目をとおした可能性を否定できないと思われる。

*29:仁右衛門の読みについて、『有島武郎集 現代日本文学大系35』(筑摩書房、1970・9・15)に従い、「にんえもん」と読んでおきたい。

*30:『有島武郎全集』第3巻(筑摩書房、1980・6・30、ルビ、傍点は省略、旧字体を新字体に直した)